

---

# ドラゴンから始まる物語

洋治

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ドラゴンから始まる物語

### 【Nコード】

N2113BA

### 【作者名】

洋治

### 【あらすじ】

自分の吐く息の大きさに緊張が増す

心臓の鼓動は激しさを増し、頭はくらくらする

足はがくがくし、手は震える

その目線の先にいるのは最強の生物、、、ドラゴン

## 1 (前書き)

処女作です。

文章力は底辺なので、上しか見ません  
ご意見ありましたら是非お願いします。

それとは別に物語として好きになって貰えたら嬉しいです。

「助ける」心の中で強く叫ぶ  
頭が冷える  
体の震えが止まる

洞窟の最奥吹き抜けの広大な部屋に静かに眠るドラゴン  
距離にして300メートル、ドラゴンに気づかせずに目的を果たす。

少年は足の裏に薄く魔力の膜を張る  
気配を消し、風の流れのままに足を滑らせる

1ヶ月草のみを食べ、匂いは消している為ドラゴンの嗅覚に捉まら  
ない

狙うは1点ドラゴンの尻尾の先、神経の通っていない部分を切り裂く  
痛みもなく気づいたら指先から血が出ていたそんな薄皮をめくるイ  
メージを頭に描く

右手に持つは小刀、しかしその刃は目に映らない程薄い  
ドラゴンの鱗を切るための、ただ一度切るためのみ特化した小刀

音もなく鱗を1枚切り取る、小刀に薄く血が付いているのを確認  
ドラゴンは眠っている  
足を止めずに走り抜け、突き当りの壁に沿って出口を目指す、、、  
いけるっ！

「グオオオオオオン」圧倒的な咆哮が部屋を揺るがす

気付かれた？何故？何故、、、っ！

迂闊さに歯噛みする、ナイフに付いたの血の匂いに反応したのか！

パニックに陥りかけた頭を整理し、思考を巡らす

距離は200メートルは離れた、お互い直接攻撃は届かない、ならば次に来るのは、、、、

今手に入れた鱗を媒介に魔力の盾を作る、このシールドの強化に全ての魔力をつぎ込む

ドラゴンの口から吐き出されたそれはレーザーの如く真っ直ぐ少年に突き進む

灼熱の炎炎を吐き終えた後、目の前に矮小な存在は存在しなかった  
「グルルウ」軽く喉を鳴らしドラゴンは再び眠りについた。

「死ぬかと思っただぜ」

そう俺は生きていた、炎を受け止めるのではなく受けた状態から流され

魔力の盾を軟化し受ける力の向きを変える事で、炎の軌道から外れ激突寸前で左の通路に

炎は壁を貫き直進する・・・おっかね（冷汗）

俺に残った負荷は全て回転に変化する、、俺は独楽か！

足に薄く張った魔力のお陰で地面を掘る事も無かったし音も出さずにすんだが

摩擦力が無い分、回転が半端なかった、、回転の真理を掴んだ気がする、、。

理論上可能な筈だがここまで上手くいくとは、俺って天才？

「っとまだ油断は出来ねえ」

緩んだ気を引き締める、周りに魔物の気配は無い、ドラゴンの影響だな

まずは枯渴した魔力を回復する必要がある

俺はナイフに付着した血を少し指で拭き取り舐める

「ぐっ！、、、、」

体中を痛みが駆け巡り、瞬間上げそうになる悲鳴を堪える、、、、

痛みが消えた時には俺の身体に人には不釣り合いな魔力が溢れていた

「これでドラゴンの血の効力が伝承の通りと判明出来たな、、」

ドラゴンの血は摂取した生物のもっとも不足した部分を強化する、、作り変えると言うべきか？自身に起きた事を鑑みそう予測する

つまり俺は魔力が殆ど無い人間だったのだ、のだ、のだあ、のだー  
(エコー)

魔法の使えない俺が何故ドラゴンの火炎ブレスを受けれたか？  
魔法が使えない程魔力の少なかった俺は魔力そのものを使う荒業に  
挑み

魔力の硬化と軟化と固定が出来るようになった

魔力の<質>を変える事によりドラゴンの炎を受けても壊れない程  
の盾が作れたという訳

ドラゴンの鱗を媒介にしたのも良かったのだろう、、つつか掌に  
埋まっただけど、、

つつかこれ融合してね？、、取れねー！

ちなみに炎を受け止めてたら、俺は今この世にいなかったね！（冷  
や汗）

右手に持ったナイフを布に包み袋に入れ首に下げる

足元に魔力で文様を描き力ある呪文を唱える

「レポート」

目の前の景色が切り替わり、見慣れた景色が広がる

「成功したな」

家に着いた事を確認した俺はすぐに飛び出しいつもの場所に

木々に囲まれた中に綺麗に円状の草原がある、そこに一人の少年が  
いた

鮮やかな金色の長髪

「だけど男だ」

惹き付けて止まないエメラルドグリーンの瞳

「しかし男だ」

見る者の心を奪う容姿に白い肌

「何故か男だ」

見た目は完全に美少女である

「残念だが男だ」

股間にゾウさんが付いているのを見たからな（無念）

「何をぶつぶつ言ってるんだい？、変態？」

「変態言うな！、むしろ紳士だ」

「？・・・誰がだい？」

「俺だ俺！」

「すいません、少し声が違う気がするんですが、、」

「少し風邪気味で声が少しね、、って詐欺士か俺は！ケイジだよ！  
もういいと手を振り、血の付いたナイフを差し出す

「舐めろ！」

「鬼畜」身構える美少年

「っ！」 かつちん来たが、確かに説明不足だった

「ルウ、お前の病気を治せるかもしれない血だ」

まっつったく見えないがルウは病気で一年後に必ず死ぬらしい

臓器の一つが欠落している為、魔法で補っているらしい

「ふふふっ冗談さ、今度は何を持ってきたの？」

言いながらルウはナイフを受け取り、疑う事無く血を舐める

「！っ」 苦痛に顔を歪めるルウ

「身体を作り変える薬だ（たぶん）自分でも試した、少し痛みはあるが死にはしない」

「これの、、っ何所、、がっ、少しだよ、、っ」 痛みを堪えるルウ

「どうだ気分は？」 落ち着いた様なので声をかける

「・・・良く解らないな、、少し後ろを向いてくれるかい？」

「解った」俺は後ろを向く、背後から何か確認している気配がする

「っ！」 大きく息を飲む音がし、「ケイジ！僕は今日はこれで帰る、  
すまない！」

駆け足で走り去るルウ。

「、、、治ったのかな？」一人になった俺は眩き、空を見上げる

「明日聞けば良いか！」

しかしそれからルウは俺の前に姿を現す事は無かった。

俺はルウの情報を仕入れようとしたが入手出来ない  
まだ10歳のガキで、捨て子の俺に情報を手に入れるのは不可能だ  
った。

しかし俺には確信がある、血の効力は本物、必ず治った筈だ  
なにか止むに止まれぬ事情があったのだろう

ルウは頭が良い上に強かった

無学な俺に読み書きを教え、剣術を叩き込んでくれた。

金持ちの家だったらしく、俺に森の外れに家を用意し沢山の本をく  
れた。

野生動物と何ら変わらない俺を人間にしてくれたのはルウだ  
いずれ見つけ出して恩を倍返ししてやる！

まずは金だ！

金を手に入れる為に手っ取り早いのはギルドに登録し冒険者になる  
事だが

その前に神の祝福がないとギルド登録が出来ない

祝福を得る方法は2択、大金を積むか

チュラン学園に入学しクエストをこなし一年間修めるか

学園は入学金は無く試験に受かれば誰でも入れる

チュラン国がギルド登録に学園を介し

優秀な人材を見逃さない為の制度だ。

俺は大金つつうか金を持ってねーので（自給自足）

学園に入る事にした。

試験を受けに学園に来たが、でけーな！

試験会場は何処だ？興奮気味にキョロキョロ見渡す

「おいおい何か場違いな猿がいるぞ」馬鹿にした声が後ろからするな  
「うきっ？（何だ？）」「猿語で返し振り向く。

取り巻きに囲まれた男が呆れた顔でこちらを見る

背はすらっと高く黒髪に黒目整った容姿をしている黒の燕尾服がよく似合う

「まさか本当に猿とはな・・・」

「うきつきー！（誰が猿だ）」

「貴様馬鹿にしているのか！クロード様この猿は私が始末します」  
取り巻きの一人が飛び出し刀を振る。

俺はビビった振りをして座り込み刀を避ける（こいつ正気か？）

「止める！」クロードと呼ばれた男は一喝し、刀を振った男は畏まる

「このような猿でも我が国の収入源となるのだ、見逃してやれ。」

「はっ」

話の流れから察するに偉い貴族かな？関わらないようにしよう

「君は残念な男だな・・・試験会場を探しているなら左の建物だ」

「ありがとうございます。」俺は一礼し会場に向かった。

「ではケイジ君、水晶に触れて魔力を込めてくれ」

ふむ、これは魔力の測定だな、確か白く蒼く黄く碧く赤く虹

合格ラインは蒼だったな

魔力の足りない人間は祝福を得られない

試験官の指示に従い水晶に触れる

俺は魔力の強さを自在に操れる為

色が蒼になるよう調節する

「ではこの紙を持って訓練場へ行ってください」

紙を受け取りこの場を後にした。

「今から木刀による手合わせを行う、魔法も使っても良いぞ」  
女教官相手の手合わせか

最低限生き延びる力があるかを見定める試験の筈だから、

女教官の攻撃にひたすら木刀で受ける事に集中する、、、、  
が、コイツ本当に女か？

一撃が異様に重い、受け流したい所だが、

目を付けられるたくない

ひたすら受け止め、必要以上に距離を取る。

「それまで！・・・君は少し臆病すぎるな、

それは時として仲間を危険に追いやる事もある忘れるな」

肝に銘じておきます。

紙を受け取る、次は筆記テストか、

「始めっ」

筆記テストの内容は一般教養が主だ、

モラルの低い人間は教養が低い事が原因となる事が多く

盗賊の育成場にしない為、教養の低い人間は

冒険者になるのが難しいシステムになっている

俺もルウが居なかつたらこの場所に一生縁がなかつただろう。

うむっ、平均点は取れたな。

「皆さまお疲れ様です、そのままお待ち頂き、

番号を呼ばれた方から面接室へ行ってください」

コンコン

「入りたまえ」

「失礼します」部屋に入り手前の椅子に座る顔を上げた先に髭面のおっさんがいた。

「君はこの学園に何故入ろうと思ったのかね？」

「冒険者になるためです。」

「何のために？」

「お金の為であり、やりたい仕事だからです。」

マニュアル化された面接を危なげなくクリア完璧！、、、っ！、、、まさか、、、っ！

重大な事に気付いた、俺は顔に出さない様全力を尽くす。

このおっさん、、、ズラだ！、しかも魔力で固定している、まさか俺以外に魔力の固定化に成功している人がいようとは、、、しかもズラに！

なんとか平静を装えた俺は、試験を合格した。

世の中は広いな（汗）

俺の冒険者への第一歩はここからだ！



「ど・れ・に・し・よ・う・か・な？」壁に貼り付けた依頼書の一  
覧を見る

チユラン学園の中にはダンジョンがある、試練の洞窟と言う名の迷  
宮である、

いかにも初心者向けの名前なのに、最下層は不明  
10階以降魔物の強さは格段に上がる、らしい  
依頼書の殆どは試練の洞窟に関する物だ

目立つ行動は取りたくないのでソロ活動に徹する  
ランク1の依頼からゴブリン討伐5体の紙を剥がす

「これを受けたいんですが」受付のおばちゃんに依頼書を渡す。  
お姉さんじゃない、おばちゃんだ。

大事な事なので2回言うおばちゃんだ、、ふう（涙）

「はい冒険者カード（仮）に書き込みました。」  
依頼を受けると入学時発行された冒険者カード（仮）  
に書き込みされる、達成後受付に報告すればOK

初めてのダンジョン探索は緊張するな（汗）

ドラゴン？あれは違うよ、登ったの！外壁を、魔力を壁に吸いつか  
せて！

魔力草（魔力を回復）食いまくったし、2度とやらない、やりたく  
ない！

しかし、生きる為ではなく、冒険の為の探索は心が躍るね！

この気持ち、まさしく愛！、、違つか？（違います）

ダンジョンは明かりもないのに何故か明るい、、、  
不思議だなと思いつながら足を進める、、、いたねゴブリン20  
体はいるね、

1階だよ？多くね？

っ！か女の子襲われてんだけど？俺20体もゴブリン倒せる程強く  
ねーし（泣）

だけど、ほっとけない。

意識を切り替え周囲を観察する、、、こちらには気づいていない  
女の子は、強いな5分は持つか

足を怪我しているな、逃がすのは無理か、  
んっ？1体気配の違うゴブリンが岩陰にいる、リーダーか？  
まずは少しでも敵の数を減らす。

ナイフを媒介に薄く長く魔力を引き延ばし硬化、固定する、  
魔力を前身に巡らせ軟化、固定する  
気配を殺し足音も無く獲物に向かう

\*「くっこんな処で、、、」

油断した、まさか宝箱に警報装置が付いているとは、しかもトラ  
バサミの罠まで！

罠は外せたが、ゴブリンに囲まれた

下卑た目で舐めまわすように私を見る、背筋が寒くなる

纏めて塵にしてやる！

「フレアボム！・・・」

「フレアボム！・・・」

「・・・？」発動しない？、っ！あのトラバサミは魔力を吸い取  
る機能もあるのか！

ゴブリンが3体こん棒を振り被り襲ってくる左に受け流し1匹を切るうとすれば  
また別の3体がこん棒を振り被り襲ってくる、人を狩るのに慣れて  
いる、ここはゴブリンが人を狩る為の部屋なのか？  
意識が、、、やだ、やだよ、、、こんな処で死にたくない！  
気力を振り絞りこん棒を受け流すが力は抜けていく、、、「助けて」

「あいよっ」

そんな軽い声が聞こえた瞬間、目の前のゴブリン達の上半身が横に  
ずれた  
私は意識を失った。

俺はゴブリンの胴体に向け一閃する、少女の目の前の10体を纏めて  
切り裂いた  
返す刃を岩陰の気配に向けて投げつける、岩を貫き気配を切り裂いた。

少女の剣を奪い魔力を張る、未だ呆然としているゴブリンを2体切り  
裂く

「ぐっ！」

左側面からこん棒が打ち降ろされた魔力の壁が致命打を軽い衝撃に  
変える。

まだ魔力は前身にしか張れないから背中を見せたらアウトだ。

ゴブリン残り8体



3方向からこん棒が迫る

俺の後ろには女の子がいる、避けるわけにはいかない

剣で受ければ、この人数相手では隙となる、上段に構え

こん棒が当たる瞬間身体を捻り受け流し、その勢いそのまま  
袈裟がけに左のゴブリンを1体切り裂く

振り下ろした状態を狙い、左から別の2匹が襲ってくる

俺は剣を足元に手放し、両手に魔力の膜（軟）を張り左からくるこ  
ん棒2つを

二つの手で右のゴブリン2体の頭に受け流す、

こん棒は綺麗な曲線を描き2つの汚い火花を咲かせた  
すかさず足元の剣を蹴り上げ右手で掴み

体制を崩した2匹を切り捨てながら目は他の3匹を追う

残り3匹は、逃げ腰になってるな

俺は右手の剣を床に突き立て胸を張る、逃げたければ逃げろと

ゴブリンはこちらをちらちら窺い

俺が動かないのを確認すると背中を向けて逃げ出した。

俺はこの瞬間に剣を先頭の一匹に投げながらこん棒を拾い追いかける  
目の前で先頭のゴブリンの頭に剣が突き刺さる

後ろの2匹は驚き足を止めこちらを振り向く

襲いかかる俺に気付いたが、後ろを向いて逃げようとする  
用意された逃げ道に、戦う選択肢は2匹の中から消えていた。

ゴブリン殲滅完了

俺は女の子に駆け寄り傷の手当てをする

薬草（森で採取、買う金も無いしね）を擦り込み包帯を巻く  
顔色は悪くない、足元のとらばさみに睡眠性の毒が塗られているな  
森で取れる物と同じだ、暫くすれば目を覚ますだろう

金髪の可愛いより綺麗と表現した方が良い美少女だ、？つうかこ  
の女の子

試験の時の女教官じゃね？改めて見ると胸が、でかいな、  
どきどきしてきた！、これが恋？（欲情の目）

ゴブリンの死体は時間と共に消え去り、後には金が残された。

1匹2ゴールドか、全部で20ゴールド

岩陰の奴は10ゴールド！ひゃっほー！

今更だけど良く勝てたねー

正直1対1ならまず負ける気はしなすが多数相手なら話は別

元々一人で生き延びてきた俺は（ルウに出会って一変したが）

自分が簡単に死ぬ存在である事を理解してるし

多数相手には如何に逃げるかが重要で戦う事は無謀でしかない事を  
知っている

俺は生き延びる事に関してはエキスパートなのだ！

「あつ宝箱だ（喜）」

ザクッ

とらばさみ発動

意識が薄れる、嫌だ、こんな最後かつこ悪いよ、薬草を、  
もう持ってないし、

「助けて」

俺は意識を失った

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2113ba/>

---

ドラゴンから始まる物語

2012年1月6日11時52分発行